

清 末 の 小 説

澤 田 瑞 穂

この文章は、1948年(昭和23)9月に学徒援護会から刊行された澤田瑞穂著『中国の文学』の第4章です。清末小説を概観した邦文文献としては最も早いもののひとつと考えられますが、同書はすでに絶版となっており入手が容易でないため、特に著者に請いここに転載いたします。誤植を訂正し、当用漢字になおしたほかはすべて原文のままです。転載を許諾されました著者にお礼を申し上げます。 編 者

一

清末とはいふまでもなく清朝末期の意味であつて、歴史の方では通常鴉片戦争(一八四〇)から辛亥革命(一九一一)に至る前後約七十年をさす。しかし文学史は一般の政治史や外交史のやうにはつきり何年何月から何年何月までといふやうに正確にはゆかないのが常であり、且つ大抵は政治史から少くとも五年なり十年なり、乃至は二十年三十年と後へずれてゐる。これは文学が元来無形のものから生れるものであるために、或る事件から相応の年月を隔てなければ形には現はれないからである。清末文学史も大体は政治史に準じて差支ないが、実際には少しずれて、ほゞ日清戦役後の自覚から生じた康有為や梁啓超等の変法維新運動あたりから、一時に清末文学らしい特色が現はれ、それが一旦辛亥革命の成功すなはち清朝の倒壊、中華民国の成立によつて打ち切られたやうなものの、清末文学の余熱は民国初年まで残つてゐて、民国六年の文学革命運動と、その翌々年に狂飈の如く起つた五四運動を経てはじめて文学の現代史に入るのである。

さて清末文学といつても範囲は広く、詩界の問題あり、文章界の問題あり、

詞曲界の問題あり、小説界の問題あり、これを短く縮めて説くことは結局文学辞典の清末文学の項を引受けるやうなもので、たゞ上手にまとめたといふ手際を見せるに過ぎない。それゆゑ、文学全般については陳子展の『中国近代文学の変遷』(民国十八年、中華書局刊)またはそれを詳密にした同氏の『最近三十年中国文学史』(民国二十年、太平洋書店刊)等の文学史に譲り、こゝではたゞ小説だけを取りあげてみる。

ところで清末小説に関しても普通に用ゐられる種本はほゞ決つてゐる。古くは胡適の「五十年来の中国文学」(『国語文学史』附録)、魯迅の『中国小説史略』があつて権威となつてをり、近くは前記陳氏の書も参考になるが、最も詳細精到なのは阿英の『晚清小説史』(民国二十六年、商務印書館刊)で、現在までのところ清末小説に関しては同書の右に出るものはないやうである。

わたしも人並に清末小説も一とほりは集めて置きたいと思ひ、北京にゐた頃いろいろと苦労したが、その蒐集は明清の小説類よりも更に困難を極め、しかも折角の蒐集も終戦によつてすべては徒勞に歸し、その尽くを失つてしまつた。いま已むなくその狭い知見と浅い記憶とをたよりに清末小説界のごく大ざつばな鳥瞰をこゝろみる。

二

従来、文学の中心地は王城の地たる北京であつたが、清末に至つて南に移り、上海がその中心地となつた。もとより広東・杭州・香港等にも多少の文学を産したが量でも質でもいふに足らず、代表はあくまで上海であつた。それは条約によつて上海が内外貿易の門戸となるや、こゝを経て外国の新文明が滔々として流れこみ、ために上海が急激に繁栄を來し文明開花の淵藪となつたからである。すなはち新興都市たる上海は北京のやうな古雅幽静な伝統がないかほりに、自由進取の氣象に富み、よく伝統の束縛を離れた新文芸の温床となり得たのである。また地理の点からも北京政府の圧迫が及びかねたので、こゝでは言論の発表もかなり自由であつた。これまた上海に新文学の榮えた理由として見遁せない。

清末文学のもう一つの中心地は日本（東京・横浜）である。これは量的には上海には及ばなかつたかも知れないが、文学史の方面からいへば上海以上に意義の深い土地である。清末文学史上の開拓者梁啓超が亡命して『清議報』や『新民叢報』を刊行して盛んに例の政論文章を書きなぐり、片手間に日本の政治小説を紹介したのも日本であれば、同じく梁氏が『新小説』を発刊してみづから小説の社会的意義を論じ、『新中国未来記』を書いて中国政治文学の魁となつたのも日本（横浜）である。その他、多数の留学生による文学の紹介や密輸入、乃至文学上の無形の土産物は莫大である。これは民国に入つてもなほ続き、かの周樹人（魯迅）・周作人兄弟をはじめとして、創造社の郭沫若・郁達夫・張資平等みな日本留学生出身であることを考へると、日本は清末文学の重要な因縁の地であつたといふよりも、むしろその発生地であり文芸の一供給源であつたといつてもよい。

古都北京を中心とする北方人が寄せ来る時勢の大浪にも気づかず、なほ太平歎楽の夢を逐ひつゝ悠長な『紅樓夢』に読み耽り、埒もない『兒女英雄伝』や『三俠五義』の類をよろこんでゐる間に、天下の形勢は次第に大きく激しく転換し、日本上海間の文芸の交流はいよいよ繁く、そのすべては上海に集まつて更に南北各地に伝播され、こゝに小説史上空前の熱潮を示した。清末小説を中国小説史の末尾と見るも、或は現代文学の直接の来源と見るも各々その立場に従つて理由のあることだが、過渡時代の小説にはそれ相応のおもしろさもあり複雑さもあつて、研究にもなかなか手数のかかる、それだけにまた興味も深い一分野である。

三

従来の小説は多くは無聊をもてあます文人消閑の作であつた。目的は自己の無聊を消すにあつたから必ずしも読者を予想しないし、作品をたゞちに世間に発表するといふことも考へなかつた。いはゆる「書を名山に蔵す」で、当代には認められなくても、後世必ず具眼の士があつて我が真価を認めてくれるだらうといふ漠然たる期待があるばかりだつた。たとへそれが本心でな

いまでも、少くともさういう述懐を試みたのが文人小説の常であつた。従つて脱稿と同時にすぐ出版元に運ぶわけでもなく、原稿のまゝに筐底に秘めて置く、或は内々で二、三の知己に見せる。それがいつしか三人から五人になり、五人が十人になり、転々と伝誦筆写されて世間にも広まつてゆく。やがて利を逐ふ書肆が評判を聞きつけてはじめてこれを版にする。その頃にはすでに多くの異本も生じてをり、また原作者の経歴は勿論、姓名すらも分らなくなつてゐる。——『紅樓夢』にせよ何にせよ、旧小説は大抵この経路を取つてゐるので、要するに当時には作品を右から左に発表出来る機関がなかつたのである。

ところが清末になると、滔々たる西洋文明の先鋒として近代印刷術が輸入され、それに乗つてはじめて新聞雑誌といふものが発生した。その上、文字を通じて新しい思想・学芸を急速に摂取しようとする時代の要求があつたので、新聞雑誌は新知識の宝船、言論発表の活舞台として続々と発刊されるやうになつた。

新聞紙として最も早いといはれる モリソン編輯の『察世俗毎月統紀伝』、それより下つて上海の『申報』、或は『天下新聞』『中外新報』『六合叢談』『遐邇貫珍』といった類の新聞のことはしばらく措いて、たゞ思想や学芸に關係の深い雑誌の方面を見ると、光緒二十一年（一八九五）に康有為一派の維新運動の機関として創刊された『強学報』が最も古く、それが禁止せられて『時務報』となり『昌言報』となり、やがて戊戌政変で康有為や梁啓超が日本に亡命してからは『清議報』となつて現はれ、その第百号の後には『新民叢報』として体裁を新にして発刊された。しかもこれは発行地が日本（横浜）であつたとはいへ、ひそかに本国にも持ちこまれ、それでも足らずに翻刻版まで流布するといふ有様であつた。これらの諸雑誌は単に維新運動の論説発表機関となつたばかりでなく、同時に梁啓超一流の新文体、洋語まじりの新詩体を育てたものとして、文学史の方でも重要な意義をもつてゐるのである。

光緒二十八年（明治三十五年、一九〇二）十月、梁啓超が「中国唯一の文学雑誌」と自称して発刊した『新小説』は果して中国学芸雑誌の開祖となつた。創刊号に梁啓超が有名な「小説と群治との關係を論ず」といふ巻頭論文を発表して

小説の社会的意義と効用とを論じたのは、人々に小説の地位を認識させると同時に、また小説を執筆する者を刺戟し、これに大きな自信を与へるに役立つた。また梁啓超本人の『新中国未来記』は幼稚きはまるものながら中国政治小説の第一作となつた。

『新小説』の刺戟によつて翌光緒二十九年(一九〇三)五月、李伯元主編の『繡像小説』が上海商務印書館から発刊された。内容の点では『新小説』よりも豊富で、李伯元の『文明小史』『活地獄』、劉鉄雲の『老残遊記』等、清末の小説界を飾る名作が多く発表されたのもこの雑誌である。これに続いて光緒三十年(一九〇四)八月に『新新小説』、三十二年(一九〇六)九月に『月月小説』三十三年(一九〇七)に『小説林』、宣統元年(一九〇九)に『小説時報』、翌二年に『小説月報』等、全く雨後の筍の如く小説雑誌が続出し、これらを発表機関として小説界は未曾有の盛況を呈するに至つたのである。

印刷の敏速、発表機関の増加、読者層の拡大、文芸の商品化、一言にしていへばジャーナリズムの盛況によつて、小説の作者はもはや昔日の如く書を名山に蔵し知己を後昆に待つ必要もなく、作品を右から左に活字にして、しかもそれ相応の報酬があるとなつては、いきほひジャーナリストといふ新職業が生れ、小説で飯を食ふ者が現はれるに至る。むかしの作者といへば有閑の満洲旗人か、科挙落第の不平文人にきまつてゐたのが、今は新聞記者・雑誌記者を兼ねた職業作家となつた。古くは『申報』の王韜、近くは『繡像小説』の李伯元、『月月小説』の吳趸人、『真美善』の曾孟樸の輩、みなそれぞれの新聞雑誌で生活するジャーナリストであつた。

これらの人々は自分では曠世の才子を以つて自認してゐるけれども、世間は文士を以つて目する。文芸が衣食の資となるに及んでは、やがて輕薄無頼の徒が増加して文芸の墮落が始まる。清朝のずつと末から民国の初年にかけての上海文壇はこの種の輕薄文士が多かつたことは魯迅が「上海文壇の一瞥」にも述べてゐるとほり。かの文学革命も、その一つの攻撃目標がこれらの低級な才子文芸に置かれてゐたといはれるほどである。

しかしながらこの墮落はどこかの国の文壇でも免れがたい現象である。清末小説もその開花期に於いては作家はみづから先覚を以つて任じ、その志も多

くは国家社会の上にあつて、みな政治革命・社会革新・国民啓蒙の使命を自覚してゐたといへる。特に梁啓超などはジャーナリストの鼻祖とはいへ、本来は政治革新の実践家であつて、その小説も彼の政論文章の変形といふべく、決して尋常の職業文士を以て目することは出来ない。その他の政治的・革命的な傾向の小説も大抵は清朝政府を忌避して筆名に隠れてゐるために本名は分らないが、その政治思想の方面から推測すると国民党に属する実際の政治運動家が方便として執筆したものも相当にあつたやうだ。これは明治の政治小説と同じ事情であり、作者が職業文士でないだけに小説の技巧の点では幼稚粗笨であるが、それだけにまた清新潑刺たる趣も見られるのである。

四

当時の小説に用ゐられた文体は俗語と文語と相半ばしてゐる。李伯元や吳趸人などのやうな小説の玄人は俗語体を多く用ゐ、ちよつと小説に手を出してみたといふやうな素人作家は多く文語体でやつてゐる。長篇小説には俗語体が多く、短篇には文語体が多い。また社会の諸相を描写したやうな小説は俗語体が多く、政治小説の類には文語体が多い。これは前者が客観的・写実的なものであるために対象を精細に描写し得る俗語体を利とし、後者は主観的・理想的なものであるから大まかな文語体でもよかつたのであらうか。なほ蘇曼殊の諸作の如き自伝風な作品も、その抒情的・浪漫的な性質上文語を利としたとも考へられる。但しこれは大体の論であつて、実際についてみればなかなか一概にはいへないやうである。

いづれにしても小説に於ける文語体の勢力はまだ大きかつた。何しろかの林琴南老人が西洋の小説多数を徹頭徹尾桐城派直伝の古文体でもつて強引に訳出し、それがまた世間に歓迎せられてゐた時代で、俗語よりも文語の方が品格が高いと感ずる気風がまだ読者の方にもあつたのである。従つて一方長篇作者たちが俗語を用ゐたのも、過去の『紅樓夢』や『儒林外史』のながれを汲み、無意識に俗語体を利用してゐるたまでで、決して小説は俗語体たるべしと自覚してゐたわけではないと思はれる。後年かの胡適が文学革命運動に

於いて白話（俗語）を正統とし、古人は無意識にこれを用ゐたが、我々の今の主張は意識的であるといつたのもこの意味である。

五

清末小説の標題の^{つのがき}角書や広告の類を見てみると、思ひ思ひに何々小説と銘打つてゐるのに気づく。たとへば政治小説・社会小説・写情小説・言情小説・哀情小説・家庭小説・歴史小説・武俠小説・偵探小説・科学小説・軍事小説・教育小説・開智小説・滑稽小説など。これは当時の人々が小説の種類をいかに見てゐたかといふことの参考にはなるが、もとより宣伝用の文字であるから厳密な分類でないことは勿論である。すなはち写情小説・言情小説・哀情小説・家庭小説といつても結局は恋愛小説といふ名称に一括することが出来る。偵探（探偵）小説・科学小説・軍事小説といつても十の九は外国物の翻訳または翻案である。その他、開智は啓蒙の意味。滑稽小説といつても諷刺揶揄の態度の強いものには何でも滑稽小説と称してゐる。故にこれらは清末小説分類の標準にはならないこと前述のとほりである。

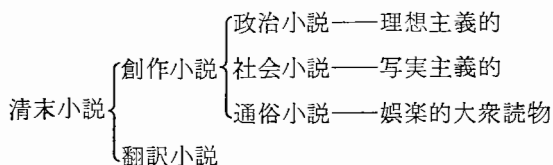
阿英の『晚清小説史』は小説の素材や主題によつて次の如く分類して記述してゐる。

- (一) 広範囲に互つて清末の社会を描いたもの。
- (二) 義和団事件を反映したもの。
- (三) 華工禁約（米国の中国人労働者排斥の条約）に反対したもの。
- (四) 実業界を描いたもの。
- (五) 立憲運動に関するもの。
- (六) 民族革命運動に関するもの。
- (七) 婦女解放問題に関するもの。
- (八) 迷信打破運動に関するもの。
- (九) 官界を暴露したもの。
- (十) 講史と公案（歴史小説と裁判小説。）
- (十一) 清末小説の末流たる遊里小説・写情小説・擬旧小説等。

(十二) 翻訳小説。

以上は清末小説の主題別分類といへるが、必ずしもそれで一貫してはゐない。それに我々が展望を利かし大づかみに理解するためにはこの分類は少し繁雑である。よつて自分はこれを整理して下の如く分類したい。すなはち清末小説をまづ創作と翻訳とに二大別する。次に創作小説を態度の理想主義的なものと写実主義的なものと通俗的なものとに三分する。理想主義的な小説とはいひかへれば当時の政治小説であるが、政治の意味が広いだけに歴史小説の一部分もこの中に入れることが出来るし、また婦人解放や華僑救済等を扱つた問題小説的なものも広義の政治小説と見做す。写実派の小説とは一口に社会小説といつてよく、現実社会の諸相、特にその醜悪面を暴露したものの。啓蒙の意は窺へるが積極的に解決を呈示するといふことをしない写実小説。通俗小説は大衆小説といつても娯楽小説といつてもよく、恋愛小説・妓女小説・武俠小説・探偵小説等の低級な読物である。

右のやうに厳めしく分類してみたものの、実はあまり自信がなく、どつちつかずのものが多く出て来るのには悩まされる。しかし文学の分類とはすべてそんなものと見て御勘辨願ひたい。便宜上これを表示すれば次のやうになる。



六

政治小説といつても、ずつと広い意味に解釈すれば大抵のものがみな政治小説に見えてしまふ。それは政治の概念が非常に広いからである。すなはち直接に政治を主題としたものはもとより、多少とも国民思想啓発の趣意を含んでゐるものならば、官吏の腐敗を暴露した小説も、迷信風俗を描いてその

愚昧を指摘した小説も、またいはゆる科学小説や軍事小説もみな政治小説の範疇に入つて来る。現実社会の解剖と国民思想の啓蒙が政治革命の前提であるとする主張からいへば写実的な社会小説もそのすべてが政治小説でなければならぬ。しかし普通にはそんなものまでも政治小説と呼ぶことはない。なぜならば、政治小説の根本条件は、必ずしも現実政治の実態を描くことではなくして、その現実を改革していかなる政治を行ふべきか、いかなる形に導くべきかの理想を明示し、もしくは暗示することではなければならぬ。すなはち政治小説は原則として理想主義的立場を取るのが普通である。但し態度は理想主義的であつても狭義の政治小説と広義の政治小説とがあつて、厳密な意味の政治小説とは、専ら政体・政府・政策等の一般政治に関する諸問題を取扱つて作者の政治に対する何等かの主張すなはち政見を示さうとするものをさす。これに対して本国または外国の政治史・革命史・革命家等のことを述べて新政治の先輩先例を紹介し革新に対する情熱を鼓舞しようとするものがあつて、これは政治小説の院外団もしくは側面援護隊ともいふべきものである。また国際外交等の時事問題をとらへて意見を述べ一般輿論を喚起しようとするもの、婦人解放、女子参政などの問題を扱つて将来の解決とあるべきすがたを示すもの、これらは直接の政治問題ではなくても広義の政治小説といつてよい。

狭義の政治小説にも、その内容となる思想傾向の方面から見ればまた二派あつて、よく清末政治思想の二大潮流を示してゐる。その一はいはゆる立憲小説。梁啓超一派の変法維新運動の宣伝用として書かれたもので、清朝政府の存続を前提として、たゞ政体・政策を革新することによつて国家の富強を来さんとするもの。その二は民族革命を主張する一派の作品。すなはち老朽腐敗しきつた満清政府ではいかに政治を新にしても所詮見込はない。新しい酒は新しい壺に盛るべし、すべからく異民族たる満洲人の専制政府を倒して漢民族による自主的な国家を建設すべきであると主張するもの。つまり滅満興漢を旗幟とする急進的な革命小説である。

以上二種の政治小説は、その主張するところは正反対であるけれども、それは革新方法に関する対立で、小説の書き方の相違ではなく、一様に理想の

国家を描き、そこに到達する手段を示してゐる。乱脈無道な現実の政治を厭ふゆゑに、理想の政治の行はれる世界を別に描いて政治はかくあるべしといふことを示す。一種の理想郷物語であるからその世界は実在しない。実在しないから写実的には書けない。そこで趣向として好んで未来記体が用ゐられ、また外国のこととか冥府のこととかいふ風に現実とは別な世界に仮托して寓話的に比喩的に叙述するといふ方法が用ゐられた。さうして作中の人名地名なども寓意的な仮名が多く、たゞ観念の代用品として出て来るに過ぎない。また筋の複雑さとか或は場面の描写とかいふ方面も必要以上には工夫しない。本来政治小説の作者には素人が多いからさういつた技巧などは得意でないのである。しかしそのかほりに議論となると達者で、作者の政論を生のみゝ持ちこみ、小説を書いてゐることを忘れて演説を続ける。要するに芸術的には幼稚・単純・粗笨・生硬で、色気も艶気もないものが多いが、好いところをいへば玄人の小説には見られない直截簡明な明るさと一種勇健な筆調とをもつてゐる。これは第一には夢と希望を描くがゆゑに、第二に技巧で読ませるのではなくて意気と熱情で読ませるがゆゑに。

政治小説の元祖『新中国未来記』は作者梁啓超の抱懐する立憲維新の理想とその具体的政策を述べたものであるが、題名が示すとほりに趣向を未来世界に立てたものである（すでに日本にも柳窓外史の『二十三年未来記』をはじめとして、服部誠一の『二十三年国会未来記』坪内雄蔵の『内地雑居未来之夢』のやうな作があるのでそれから暗示を受けたかも知れない）。すなはち学問識見の高い老先生を点出し、それが未来の万国大会に於いて連続講演を行ふといふ風は大筋を組み、その老先生の口を借りて作者の政論を開陳する。

しかもそれが長々しく法律や規定や論文を引用するに至つては、たしかに作者自身のいふとほり「小説のやうで小説でもない。論文のやうで論文でもない。何だか分からない文体だ」（緒言）。要するに小説体の論文、論文体の小説といふことが出来ようか。

『月月小説』に發表された春颯の『未来世界』二十六回も同様の未来記体。いかにして立憲準備をなすべきか、いかにすれば立憲政体に到達出来るかの過程を説いたもので、中国は今こそ立憲の時代であるとしてゐる。梁啓超一

派の立憲維新党の作であることは疑ひない。

『憲之魂』十八回（光緒三十三年，新世界小説社刊）は寓話体で，趣向を冥界に取り，その前半に於ては冥界の政治がいかにか腐敗し，百弊發生し，あまつさへ摩竭陞国だの力吉祥国だの劫化他国だのといふ諸外国のために戦敗・賠償・開港等の侮を受けて遂に救ふべからざるの情形にたち至つたことを叙し，後に閻羅天子遂に意を決して立憲準備の詔を下し，それより着々として諸般の新政を施し，冥界も日に興隆することになつた。その後更に侵略し來つた外国と戦つてこれに大勝し，これより國際的地位を高め，巧妙な外交政策によつて諸種の利権を回収し，皇基は磐石よりも安く，實業は發達し民智は開け，野に遊惰の民なく国に文明の俗あり，完全に一個の君主立憲国になつたと述べてゐる。事は冥界であり閻羅天子であるが，それがいちいち当時の清国に比照してゐることはいふまでもない。かういふ冥界の事に托した小説にはなほ葛小儂の『鬼府志』初集といふのを読んだことがあるが内容の詳細を忘れた。また吳趸人の短篇『立憲万歳』（『月月小説』第五期）は天上界の立憲運動を滑稽に書いたものである。

民族革命を主張したものとして阿英は『自由結婚』第一篇十回，『洗恥記』六回，『獅子吼』八回，『廬梭魂』などを挙げてゐるが，自分の読んだことのあるのは『自由結婚』と『廬梭魂』の二種だけである。

『自由結婚』第一編（光緒二十九年，自由社刊）は濃綠色表紙の薄い一冊で，猶太遺民万古恨著・震旦女士自由花訳とし，裏表紙には英文の表題までつけていかにも翻訳物らしく見せかけてゐるが，勿論政治小説にありがちな仮托であり，併せて当局の眼を避けようとした手段である。一篇の梗概をいふと，愛国といふ名の一国，君主も貴族も平民もなく，たゞ盜賊といふ階級と奴隸といふ階級だけで出来あがつてゐる国家，政權はその盜賊階級に握られてゐるといふ盜主国体の国に，黄禍といふ少年と閨閨といふ少女があつて，偶然のことから仲よくなつた。二人とも民族革命思想を抱いてゐて，閨閨の乳母さへもその感化を受けてゐた。黄禍の母親は，かつて某地の基督教宣教師事件に際して侃諤の言を以つて外人の要求を拒むべしと痛論したので罪を得て処刑されたといふ硬骨の父親黄人傑の遺志を継いで少年黄禍が革命に参加する

ことを希望してゐた。一方、少女関関の家庭は、叔父が官吏従兄が貿易仲買人ときてゐるのでつねに意見の衝突を免れなかつた。やがて黄禍と関関とは婚約する。その後あるとき二人は扇を拾つたが、それが外国人の品であつたことから争ひとなり、遂に警察沙汰にまでなつて関関の乳母が代りに拘引された。後、革命党の者が乳母を救ひ出してくれたので、黄禍・関関・乳母の三人は難を避けて逃亡する。しかるにその黨員が却つて拘引されたといふことを知つて憤激の極、遂に一緒に船から投身する。以上で第一編。未完のまままで切れてゐる。さて愛国とはいふまでもなく当時の清国をさす。梗概にも現はれてゐるやうに、作者は愛国の如き専制政体を憎み、外人の横暴を憎む。人間である以上はかやうな外人に対して復讐しなければならぬ。外人の横暴は大半は異民族政府のさせるわざであるから、まづその異民族政府に復讐しなければならぬ。それには裏切者からやつつけなければならぬ。以上を遂行するには我々同志の者が団結して革命の軍を興さなければならぬ、とする。さうして作者のかゝる激烈な民族革命の主張の前にはいはゆる維新運動の一派も散々にこきおろされてゐる。作者はいふ「もし政府が同種民族であるなら立憲もよからう。しかし現在の政府は異民族ではないか。そんな政府と一緒になつて何の憲法を立てようといふのだ。」当時立憲派と革命派が猛烈に論戦しあつたことは『立憲論と革命論の熱戦』といふ書物が出てゐることも分るが、これは小説を借りて立憲派を攻撃したものである。

『廬梭魂』もまた民族革命鼓吹の小説で、漢民族を唐人国、満洲を曼殊とし、天下の英雄、黄帝の子孫を糾合して曼殊を駆逐し、自由独立の漢族国家を建てるといふことを叙す。『水滸伝』から脱化したやうな趣があつて、その発端もまた水滸^{ハツ}ばりだ。すなはち廬梭の魂が東方に來り、黄宗羲・展雄・陳涉と一緒になつて冥界の君主制度を倒すといふ謀を立てたが、閻羅王に逮捕されさうになつたので三人とも人間界に逃れ出た云々。そこで書名も『廬梭魂』としたのである。刊行年月も発刊所も記してゐないのは、けだし一種の秘密出版である。

七

広義の政治小説として自国の過去の歴史に取材したものがあつた。これは歴史小説の様式を取つてゐるけれども、単なる興味のための演義小説（『三国志演義』の類）とは意味を異にし、多かれ少かれ政治革命の意識を含んだ政治小説の別体である。すなはち歴史上で特に政治・外交または民族問題を含んだ一頁を選んで叙述し、これを現実に比照し或は未来の解決を暗示する。たとへば明末亡国の惨史を描くが如きは従来清朝政府によつて抹消され歪曲されてゐた部分であるゆゑに、これを直叙することは異民族の侵入に対する痛憤を表はし、直ちに滅満興漢の民族革命に響くのである。その他、国家の危局に際して為すことを知らぬ為政者の無能と腐敗を描き、或は愛国志士の壮烈を嘆じて、読者をして現実の政治に対する憤激と革命の熱情とを催さしめざればやまない。これは史材の選び方からしてすでに作者がその意図を以つてかゝつてゐるからである。呉趼人の『痛史』二十七回、『兩晋演義』二十三回、李亮丞の『熱血痕』四十回、沁梅子の『精禽填海記』十回等みなこの態度である。また読者にとつては記憶の新たなる義和団の騒乱を録した小説——憂患余生の『鄰女語』、林琴南の『劍腥録』（後名『京華碧血録』）、及び彈詞ではあるが李伯元の『庚子國變彈詞』等——は政治小説とはいへないにしても、對外關係の大事變を扱つてゐるだけに政治的意味は無言の裡に窺はれるのである。

外国の革命史・独立史を伝えるものも、政治革命に関する先例と模範とを示し併せて士氣を鼓舞する点に於いて間接的な政治小説である。これは矢野竜溪の『経国美談』がテーベの独立を描いたものでありながら明治の政治小説に重要な地位を占めてゐることを考へれば納得のゆくことであらう。清末にはあまり有名なものは出てゐないが、ソフィアの歴史を書いた羽衣女士の『東欧女豪傑』五回、仏蘭西革命を述べた雨塵子の『洪水禍』等があり、また小説ではないが梁啓超の『新羅馬伝奇』の類も外国種の政治物である。『経国美談』はすでに雨塵子によつて漢訳され（前後編二冊、光緒二十八年、商務印

書館刊), 更に『経国美談新戯』といふ脚本にもなつてゐる(『繡像小説』)。その他, 洗紅齋主の『泰西歴史演義』三十六回(『繡像小説』), 清河の『^{アメリカ}美国独立史別裁』(『月月小説』), 陳鴻壁女士の『^{スコットランド}蘇格蘭独立記』(『小説林』, 後に小説林社より単行)等もあるが同様に翻訳である。それから好んで虚無党に関するものが紹介せられ, 刺客だの爆裂弾だのといふ過激な文字が躍つてゐるのも爆発に近づいた末期の思想界を窺はせるに十分である。

重大な時事問題を捉へて国民の輿論を喚起し政府を攻撃する小説もたしかに広義の政治小説である。その一つは阿英のいふ「反華工禁約運動」の小説で, 無名氏の『苦社会』四十八回(光緒三十一年, 上海図書集成局刊), 中国涼血人の『拒約奇譚』(光緒三十二年, 啓智書社刊), 碧荷館主人の『黄金世界』二卷二十回(光緒三十三年, 小説林刊)等がある。

婦人問題を取扱つて男女同権・女子教育・婦女参政等を説く小説には頤瑣の『黄繡球』二冊三十回(光緒三十一年『新小説』, 三十三年新小説社刊), 亜東破仏の『閨中劍』, 思綺斎の『女子権』十二回(光緒三十三年, 作新社刊)等があるが, 最もすぐれているのは『黄繡球』で, 西洋文化の影響を受けて男女平等の理を知り女性解放の必要を痛感する黄繡球といふ女性を主人公とし, 彼女が反動勢力と戦ひつゝ, いかにして教育事業を興し, いかにして他の女性を感化させていつたかの径路と不屈不撓の精神とを描く。特に女子教育問題に重点を置いてゐて, 教育小説ともいふべき性質をもつており, 他の女性生活の内幕を暴露した低級な小説とはその撰を異にするのである。

八

劉鉄雲の『老残遊記』と李伯元の『官場現形記』とはすでに日本にも翻訳されてゐるので話をするのに至極好都合である。一体この二作を比較してみると, 『老残遊記』はまだ文人がはじめて小説を書いてみたといふような素人くさいところがあり, 発端の, 暴風に難破する船を描いて清朝政府に喩へたり, 山中で不思議な女と議論をしたり, とかく空想的なものがあるかと思ふと, 濟南大明湖畔で大鼓書を聴くすぐれた写実の部分もあつて全篇に統一

がなく、要するに技巧的には未熟な作品であるが、これでも作者の態度は眞摯樸実で読者にも好感を与へる。そこへゆくと『官場現形記』は徹頭徹尾写真で老練精密。いはゆる貪官汚吏の表裏を描き、作者满腔の憎悪を冷嘲熱諷に代へて全篇にまき散らしてゐる。たしかに熟練した小説家の小説であるが、読者はこの戯画化された官吏の醜態に笑を催しながらも、どうかすると果してこんな貪官汚吏ばかりであつたらうかといふ疑問を起し、そこに作者の悪意を見せられたやうな気がする。以下、読者の受けるかういふ感じの由つて来るところを考へ、清末社会小説の本質を分析してみたい。

この二作は清末社会小説の代表作とされるものである。しかしそれらはなぜ社会小説か、政界を描き官吏を描くからむしろ政治小説ではないかとの疑問も起る。たしかにその疑問には理由がある。政治小説も社会小説も実は性格の異つた兄弟であつて、その母胎は現実である。腐敗墮落しきつて百弊続出の政府であり官吏であり、それと結托する土豪劣紳であり、無智な国民であり、その他百般の社会事相である。志ある者はその現実に苦しむゆゑに現実を憎み憤り、これを何とかしなければ遂には亡国の惨を招くであろうと苦慮する。だが為政者はもとより国民全般が偷安に慣れて危きを悟らない。魚市に入つてなまぐさきを知らないと同じく腐敗の裡に棲んで却つて腐敗の味を甘しとしてゐる。文学は国民を警醒しこれに反省と自覚を促すことより始めなければならぬ。故に政治小説は立憲とか革命とかいふ理想を掲げ、空想と議論によつて人々を鼓舞し、一時もはやく現実からその高い理想の段階に飛躍させようとする。しかるに社会小説の作家たちは、革新の前提は啓発、啓発の前提は反省、反省の前提は現実の仮借なき暴露、社会病態の直写、社会悪の剔出であるとする。ところが社会小説は現実の暴露に専念するだけで、それ以上の解決や救済を示さない。客観的に「かくある」相のみを示して「あるべき」相を示すことを忘れてゐる。忘れてゐるのではなくして、最初から自分の畠ではないとしてゐる。だから虚偽と罪悪を暴露して容赦なく筆誅し、対象を滑稽化して翻奔する。読者はそれによつて痛快を覚え笑を發する。しかし読み終つたとき巻を掩うて残るものはたゞ救ひのない絶望感と、虚無的な後味のみである。少し余談になるが、この自然主義はひとり清末の

社会小説に限った傾向ではなく、何だか中国小説の暗い宿命的な伝統であるやうな気がする。過去の『金瓶梅』でも『儒林外史』でもさうだし、後の魯迅の『狂人日記』『阿Q正伝』その他の諸短篇、下つては茅盾や張天翼の作品、或は老舎のいはゆる幽默小説——『老張の哲学』『二馬』『趙子曰』『離婚』『駱駝祥子』——に至るまで、みな暗い翳を曳いてゐないものはない。特に老舎の『駱駝祥子』などは極端な絶望の書ではないか。

政治小説の作家が大抵進歩的な思想家乃至実践家で、小説はその余業として革新運動の方便に使つたものであつたといふことは前にも述べた。政治小説が技巧的には幼稚なもの、さうした一つの理由があつたからだ。これに対して社会小説の作家は文筆を職業とする新聞人が多く、技巧的にはみな百戦練磨の玄人であつた。ところがその思想となると案外に保守的・反動的なところがあつて、革命運動の実践は無論のこと、立憲の維新のといふ論議にも容易に浮かされなかつた。彼等は思想よりも人を見る。おまけに人を信じ愛するよりも人を疑ひ憎む偏癖が強かつた。あまりに主我的で人を容れないのである。社会小説がたゞ現実の社会悪を摘発し、人を憎み散らすばかりで何の解決をも示さない絶望の文学であるのも彼等のかうした性格から来てゐるものと思はれる。(魯迅はみづから、その性このんで人を疑ふといつてゐるがこれは悲痛な反語だ。)

清末の社会小説が写実的であるといふことについては大体意見が一致してゐる。理想を懸けず空想を逐はない現実直写の小説が写実的になることは極めて自然だ。しかしそれも比較的話であつて、仏蘭西自然主義作家のやうな科学的写実主義とはかなり性質が違ふ。写実の上に作者が対象を憎悪し忿怒し嫉視する個人的感情が加はつたもの、それが怒号叫喚とはならず筆端から水滴のやうにこぼれ落ちる。勿体らしくいへば個人主義的感傷的写実主義である。清末の社会小説が一に譴責小説とよばれるのも理由があることで、感傷的写実の結果はたしかにさうした傾向になるのである。譴責小説とは魯迅の命名で、虚偽を叱責し糾弾する小説といふ意味である。『中国小説史略』にいふ、「光緒庚子(一九〇〇)の後、譴責小説が特に盛んに出た。それは嘉慶以来、内乱はそのたびに平定されたが(白蓮教・太平天国・長髮賊・回教徒)

またしばしば外敵にもやられた(英・仏・日本)。民衆は何も知らずに茶を啜りながら逆賊平定の講釈でも聴いてゐたが、有識者はすでに翻然改革を考へ、敵愾心によつて維新と愛國とを叫び、特に富強といふことに意を注いだ。戊戌政変が失敗し、二年を経て庚子の年に義和団の変が起つた。国民は政府が共に政治を図るに足らざることを知つて急に攻撃する気持になつた。それが小説では裏面を暴いてその悪弊を明かにし、時の政治に対しては厳に糾弾を加へ、或は更に拈げて風俗にも及んだ。その意は世を匡正するにあること勿論なれど、諷刺小説と似たところがある。さうして筆致は露骨で、甚だしきは強すぎるやうな筆調を用ゐて時人に投げようとした。だから(諷刺小説に較べると)その度量や技巧はかなり違ふのである。そこで別にこれを譴責小説といふ。」

本来の社会小説は時弊の摘発にあり、その虚偽を暴かざればやまない激しい批判精神には敬意を払はなければならぬ。しかしそれが公憤すなわち社会正義感であるうちはよいが、個人の眼孔と感情とを規準にするといふ弱点から、作家の素質が落ちるにつれて作品も漸次に墮落しはじめる。公憤はやがて私憤となり、遂には興味のための暴露、悪意の嘲笑揶揄となり、こゝに低級な暴露小説に墮ちる。その更に墮落したものが好んで社会の暗黒面を獵奇的に探訪する黒幕小説となつて民国初年に流行する。黒幕とは日本語の意味とは少し違つて内幕とか裏面とかの意味である。政治家の黒幕、教育家の黒幕、学者の黒幕、商人の黒幕、妓女の黒幕という風に——。これは本来社会の公器であるべき新聞が悪徳記者に悪用されては強請の種になると同じ道理であつた。小説家といへば何だか探偵のやうで、他人の秘密を嗅ぎ出してこれを筆にする無頼漢のやうに思はれがちであるが、さういふ誤解を生ぜしめた責任の大半は譴責小説の作者が負ふべきだと論ずる人があるのも尤もの次第である。

九

中国で民衆から最も恐れられ忌み嫌はれながら、同時に最も憧憬され羨望

されて来たのは官吏である。中国の官吏は裁判権をもつ。民衆の最も恐れるのは裁判沙汰になることで、これを打官司といつて聞くだけでも身慄をした。それは罪を恐れたり生命を失ふことを恐れるよりも、むしろ贈賄のために家産全部を蕩尽するほどの憂目にあふことを恐れるのである。だからその反面をいへば、官吏になることは大いなる^{かねもち}発財の途を開くことである。そこで科挙及第は士人最大の夢となり、俗文学でもこれを人間無上の幸福であるやうに書いてゐるのは、もとより名誉心もあるが直接には発財が眼目である。士人はものごころつくより早く受験勉強に精魂を疲らせ、老いて白髪に至つてもなほ断念しない。幸にして及第した者は仮に政治に関する智識経験は零であつても、万事は下僚の者がやつてくれるから、たゞその地位だけで勤まるばかりか、事あるごとに莫大な賄賂が転がりこむ。地位の高さに応じてその収入も多くなる。従つて獵官運動はいよいよ激しい。

このあこがれの官吏たらんと志して、しかも志を逐げ得なかつた者が、失望と不平を文筆に紛らそうとしてよくわやくな小説などを書いた。民衆の憧憬と怨嗟的である官吏生活がまづ譴責の最初の目標となることは極めて自然であると共に、作者の「譴責」さへも、実は落第の不平が無意識の嫉視となつて作用している場合が全くないとはいへないだらう。極端な憧憬は、それが得られなかつた時にまた極端な憎悪に変ることが多いからである。官僚生活暴露の代表作『官場現形記』の作者李伯元は江蘇の人、幾度か試験を受けて悉く落第し、遂に去つて上海に赴き、『指南報』『遊戯報』等を編輯した。その著作の動機が不平と嫉妬にあつたといへば作者の心事を誣ひることにならうが、みづから省みて断じてさうではないと答へることは恐らく作者自身にも出来まいと思はれる。

しかし人々のいひたいところを痛快にいつてくれたといふことで『官場現形記』は最も世人の歓迎を受けた。従つてその影響もまた大きく、その後、冷泉亭長の『後官場現形記』、心冷血熱人の『新官場現形記』、延陵隱叟の『特別新官場現形記』、陸士諤の『官場怪現狀』、傀儡山人の『官場笑話』、天夢の『官場離婚案』、李韻の『官場風流案』、その他官場何々と称する模倣作が続出した。また李伯元の『活地獄』(『繡像小説』)は官僚政治の奥の院たる

恐怖の監獄生活を描いたものとして特異な作品である。

官吏生活は当時の社会悪の源泉であるが、暴露と譴責を受けるべきは決して官吏だけに止まらず、これをめぐる全国民の愚昧と陋劣もまた同罪である。いはば悪は全国民の合作であつて、暴露と譴責はこれを全社会に及ぼさなければならない。何しろ四千年前の興亡常なき歴史の間に、民族の血の純潔を失い、権謀術数・狡獪譎詐・面従腹背を以つてむしろその人の才智として誇るほどの虚偽に骨髓まで侵されてゐるこの老大国の国民。社会のどの一隅をたづねても虚偽と醜悪ならざるはない。作家の眼は官僚生活から転じて広く社会全般に向けられる。李伯元の『文明小史』、吳趸人の『二十年目睹之怪現狀』、東亜病夫(曾樸)の『孽海花』等はみな広範囲に亙る社会の怪現狀を活写したものであり、『官場現形記』と並ぶ名作ぞろひである。

作家の眼は探照灯の如くつねに虚偽を探して廻つてゐる。それが社会のある一点で停止したとき、局部的な暴露小説が生れる。たとへば維新党と称する政治運動家にも裏面がある。それを描くと『新党陞官發財記』(作者不詳)、『上海之維新党』(浪蕩男兒)、『一字不識之新党』(杭州老転)等が出来る。もし商人階級を描けば姬文の『市声』、吳趸人の『發財秘訣』、雲間天贅生の『商界現形記』となり、教育界を描けば吳趸人の『学界鏡』、天僂生の『学究教育談』等。更に留学生に転じては履冰の『東京夢』、吳蒙の『学究新談』、老林の『学堂現形記』(学究変相、学堂笑話ともいふ)、瘦腰生の『最近学堂現形記』、遯廬の『学生現形記』、叔夏の『女学生』新しいところでは不肖生の『留東外史』等の愚劣な暴露小説を生む。宗教家(僧侶道士等)の欺瞞と迷信家の蒙昧とを描いては嘿生の『玉仏縁』、壮者の『掃迷帚』、吳趸人の『瞎騙奇聞』。女性生活を描いては南浦蕙珠女士の『最近女界現形記』四十五回をはじめ、八宝王郎の『女界爛汚史』、陸士諤の『女子騙術奇談』等。その他これに類する暴露小説は枚挙に遑なく、世はまさに現形記物の全盛時代。それが一段墮落して黒幕小説となつた次第はすでに述べたとほりである。

十

文学として取るべきもの、少くとも清末小説としての時代的意義をもつものは政治小説と社会小説だけで（勿論その全部ではない）それ以下の恋愛小説・妓女小説・武俠小説・公案小説・探偵小説等に至つては、もはや文学の名に値しない伝統的・封建的な大衆読物が多い。

男女の恋情を描いたものは明清以来いはゆる佳人才子小説として埒もないものがいくらかでも出てゐるが、吳趸人が『恨海』や『劫余灰』を書いて写情小説といふものを提唱し出してからやゝ新味を出すやうになつた。しかしそれも背景となる世界が少し広くなり時代が近くなつてゐるといふだけで、両性問題の新しい解釈を示すわけでもなく、また恋愛の新しい型を見せるのでもなく、結局は悲歎離合を写す佳人才子小説の後身といふべきものである。たゞ吳趸人の写情小説はことさらに悲惨な境遇や運命を叙して読者の涙をさそふ。つまり悲劇味のまさつてゐるのが特色で、そのために哀情小説ともよばれる。『恨海』は義和団事変の騒乱を背景として二組の許婚男女の墮ちゆく不幸な運命を描く。わづか十日間で脱稿したもので、後から読むとその悲惨なところに至つては自分でも涙がこぼれると作者は告白しており、吳趸人自身特に気に入つてゐた小説らしい。義和団事変を取扱つてゐることだけでもこの小説は一読の価値がある。『劫余灰』は朱婉貞といふ女主人が親戚のある悪者のために謀られ、転々として悲惨な運命に弄ばれたが、結局はすでに死んだと思つた許嫁の男に再会して一家団円したといふ筋で、情節は全く『剪灯余話』の「芙蓉屏記」や『醒世恆言』卷三十六「蔡瑞虹忍辱報仇」を焼きなほしたものだ。しかも許嫁の男陳耕伯は流浪の中に別に妻を娶つてゐたので合議の結果二人の女を平等の妻として団円したとはあくまで通俗的。全く旧小説の俗套に墮してゐる。新しい小説ならば眞の悲劇はこゝから始まるはずである。

吳趸人の影響下に李涵秋や天虚我生などの恋愛小説が多数生産され、後にはいはゆる鴛鴦蝴蝶派の甘い甘いロマンスの大流行となる。また例の蘇曼殊

は日本人か中国人かの問題で我が国にもよく知られてをり、その代表作『断鴻零雁記』も翻訳されてゐるが、小説史の方から見れば所詮はこの写情小説の一種であつて、評判ほどに高い地位を与へ得るものとはいへない。

恋愛小説に似て非なるものは遊里を中心として性愛を描く妓女小説。魯迅は狹邪小説といつてゐるが名称は狹邪小説でも嫖界小説でも遊冶小説でもよい。その遠祖をたづねれば『紅樓夢』までゆくが、直接には陳森書の『品花寶鑑』、慕真山人の『青樓夢』、魏子安の『花月痕』、韓子雲の『海上花列伝』等の系統を引くもので、清末の作としては漱六山房（張春帆）の『九尾亀』百九十二回、警夢癡仙（孫家振）の『海上繁華夢』一百回が最も有名。後は老上海の『上海新繁華夢』四十回、黄小配『廿載繁華夢』、天夢『蘇州繁華夢』、夢花館主『九尾狐』など、書名からしても陳々相因る模倣作ばかりである。この種の嫖界小説は一方に『板橋雜記』一類の妓女評判記の影響をも受けてゐるためか、大抵は妓女を美化し、たとへば本来は名門出身であるが不幸にして淪落の生涯に陥つたといふ風に描き、おまけに多情多感にして詩詞にもたくみであるとする。そこに同じく多情多感の才子が現はれて恋愛が開始されるといつた塩梅。輕薄無頼の文士が才子で、売女が佳人、金銭でする性の取引が恋愛とあつては遊蕩鼓吹の文学に外ならず、その美化の程度から結局遊里を背景とする佳人才子小説といふことになるだらう。これらの写情小説や妓女小説の子孫が今日流行の陳大悲・張恨水・李薰風・耿小的等で、張恨水の『啼笑姻縁』の成功も実は伝統的な通俗小説の諸要素を巧みに取り入れて按排したところにあるといへる。

最後に武俠小説・公案小説（裁判小説）及び新式な探偵小説がある。武俠小説は講釈師石玉崑の講談から出た『三俠五義』が光緒初年に出て人気を得たので、続いて『小五義』『続小五義』だのといふのを出した。それらの模倣作が『英雄大八義』『英雄小八義』『七劍十三俠』『九劍十八俠』、新しいところで不肖生の『江湖奇俠伝』その他何々劍俠伝と称する赤本。内容は岩見重太郎や戸沢白雲齋や猿飛佐助の出る講談本と思つて大体間違はない。北京東安市場の一古書肆の番頭、むつかしい古書の名や版本をよく知つてゐるのが店番をしながら何か読み耽つてゐるので何だらうとふと覗いてみたら

『峨眉劍俠伝』とかいふ講釈本、紺屋の白袴の諺どほりなのに苦笑したことがあるが、この種の武俠物は今でも少年の間になかなか人気がある。白蓮教や義和団以来の神秘主義的な結社の間にもこの武俠・劍俠の思想が伝統してゐるやうにも思はれ、講釈本といへども中国社会の解剖には案外の参考になるものがあるかも知れない。

公案小説も『包公案』から始まつて『施公案』『彭公案』『劉公案』『李公案』と続いた筋書だけの裁判物。これも貪官汚吏に悩まされる民衆の痛苦を表白したものとすれば流行の社会的意義はおろそかには出来ない。旧式な公案小説の下地のあるところへ外国の探偵小説が輸入されたので清末から民国にかけての下層読書界は探偵小説でなければ承知しないほどの大流行となつたが、それも十中の九は翻訳で、創作には見るべきものはない。呉趼人にも『中国偵探案』などというちやちなものがあるが、片々たる筆記小説風なもので、到底周瘦鷗や包天笑や程小青が訳するところのリュバンやシャーロックホルムズには及ぶべくもない。

写情小説であれ妓女小説であれ武俠小説であれ公案小説であれ探偵小説であれ、およそこの類の通俗小説は、どこに文学的価値があるかを見るよりも、なぜそれほど大衆に受けるかの社会的意義をたづねることが大切である。評論家韓侍桁はその一理由として、五四以来の中国新文学は急激に西欧文学の影響を受けて中国文学の伝統から切り離されたのみならず、専ら個人主義的・天才的に発達した結果、芸術が濃厚な哲学的気味を帯びるやうになり、一般大衆とは完全に分離してしまつた。それに反して大衆作家は大衆の伝統的な人生観と宇宙観に立脚して物語を書く。その物語の可能性は大衆の実生活を隔ること遠いけれども、大衆が夢想してしかも得られざる慾望を描くゆゑに、大衆は実生活の苦を忘れてこれに麻醉するのでであると論じてゐる(『参差集』の「通俗文学解剖」)。大衆文芸問題は中国の文壇でもいろいろに論議されてゐるが、これを研究するには時代の近い関係上、清末の通俗読物を特によく調べる必要があらうと思ふ。

十一

最後に翻訳小説について一瞥する。

どの国の文芸でも、その過渡期に於いては外国文学の翻訳によつて刺戟や指導を受けるのが通例であつて、清末の小説界もまたその例に漏れない。

外国小説をある目的を以つて意識的に翻訳するやうになつたのは、創作小説の勃興と同じく日清戦争後の反省と自覚にもとづく一部有識者の提唱と実践によるものであつた。しかし外国小説を翻訳するに至つた動機や目的は人によつて必ずしも一様ではなかつた。すなはち政治運動の宣伝用とするもの。国民の一般的な教育・啓蒙を目的とするもの・興味のためのもの、といふやうに目的はそれぞれ異つてゐるのである。さうしてこの目的の差異は同時に翻訳される小説の種類・傾向をも規定するのである。

梁啓超が明治の政治小説『佳人之奇遇』を訳しながら一方に「訳印政治小説序」(光緒二十四年、『清議報』第一冊)を書いて外国小説翻訳の必要と效用とを説いたのは、「いま特に外国の名儒が撰述するところにして今日の中国の時局に関切するものを採りて次第にこれを訳す。……愛国の士、庶くはこれを覽よ」の言葉のとほり、全く国民の政治思想啓蒙を目的としたものであつた。

しかし専ら政治的意味をもつた翻訳は梁啓超が考へたほどには現はれてゐない。また梁啓超自身としても必ずしも政治小説にばかり拘泥してゐたわけでもないらしいことは、彼みづから『十五小豪傑』(十五少年)を訳してゐることでも知られる。すなはち教育の意味があればそれでよいとしたのである。この気持はもつと広くなれば、すべて知的な小説、特に科学的啓蒙の翻訳となる。すなはち呉趼人が菊池幽芳原作の「電術奇談」を訳してゐるのもそれ。また日本でもいはゆるベルン物としてよこばれたジュール・ベルヌの科学小説が訳されてゐるのもそれである(商務印書館、説部叢書第一編『環游月球』すなはち月世界旅行記)。しかしえてして政治だの教育だの啓蒙だのといふ意識をもつた小説は読者から飽かれやすい。読者の虚栄心はあまり平明で啓蒙の看板をさげたやうなものには却つて反発を感ずるからである。いや、それより

もつと大きな理由は小説に色気がないこと、読んでおもしろくないことである。教養程度の低い国民を啓蒙するには何としても小説のおもしろさを餌として釣らなければならぬ。そこで翻訳者も低い程度の読者層を予想して興味第一の小説を選ぶ。そのうちに政治も教育もどこかへ忘れ去つた興味本位のものとなり、世は滔々として翻訳の通俗娯楽小説流行となるのである。

この興味本位といふことが清末翻訳小説の種類・性質・傾向等のすべてを決定してゐるやうに思ふ。すなはち選択の標準を通俗小説とすること。或は純文学の通俗小説化。原作の文学性・芸術性の無視・喪失。原作より筋（事実）のみを抽出する。戯曲の小説化。重訳・意訳・節訳・刪訳の横行、等。訳者は原作がその国の第一流の名作であるからとか、文学的価値が高いからとかいふ理由で翻訳に取りかゝるのではない。いひかへれば自国の文学を高め、自己を豊富にするためといふやうな気持からではない。当時の中国人の教養程度からいつても、ある国の第一流の名作を理解し、その文学的価値を認識するなどといふことは到底思ひもよらぬことだつたのである。例を日本物の漢訳に取つてみると、露伴・鷗外・漱石等の作品は清末には何も訳されてゐない。なるほど尾崎紅葉が訳されてゐるが、それは『寒牡丹』『美人烟草』『俠黒奴』などといふ原作さへも見当のつかぬ二流三流の作品が訳されてゐるだけである（実は創作ではない、紅葉が外国物を訳したのを更に重訳したのだ）。そのかほりに菊池幽芳・江見水蔭・黒岩涙香・押川春浪・村井弦齋などの通俗物が却つて多く訳されてをり、漢詩人町田柳塘原作の『橘英男』といふ軍事探偵物の講談まで訳されてゐるから驚く。

しかしさういへば例の翻訳専門の林琴南は世界各国の名作傑作を多数訳してゐるではないかとの反問があるに違ひない。たしかに林琴南は世界の名作を中国に紹介した点では文学史上非常な功勞者である。けれども林氏が外国の名作を訳したといつても実は意識的ではない、みな偶然の結果であつておもしろいものを片端から訳していつたのでその中に名作も多数まじることになつたといふにすぎない。林訳の小説には名作と同時に二流三流の駄作も多い。これは林琴南に文学鑑識の眼があつて、文学的標準によつて選択したのでないことを示す。元來、林琴南は英文も日文も何一つ読めない、たゞの

文章上手の老先生にすぎず、原作の選択権と原文の読解は、原文の読める別の口述者（共訳者）に握られ、林氏はその口述を基礎に文辞を修飾して小説としたのである。林氏を一躍翻訳家にしたかの『巴黎茶花女遺事』（デュウマの『椿姫』）も、パリ帰りの友人が物語つたのを聞いて、それはおもしろい情話だと文章にしたのが大当りを取つたので、全くの偶然に出たものであつた。

翻訳史の後期に於ける探偵小説の盛行といふ現象も翻訳の興味本位主義を物語るものであらう。探偵小説は中国伝統の裁判小説や武俠小説とも関係が深く（名探偵は奸を暴く剣俠だ）、また一般に悪を暴くといふ点から当時の社会小説とも一脈通ずるところがあつて、種々の原因から流行を来したものと思はれるが、読書界に於けるこの好尚のために、訳者もまた探偵小説または探偵小説的興味のあるものばかりをあさつて、翻訳してゐる。留学生などが大部分は内職として、一部分は自分の興味から翻訳したものが多いと推測される。たとへばあの周作人でさへ碧蘿女士の筆名でボウの『黄金虫』を訳してゐる（小説林社刊）。相当高級な作品だつたとはいへ、やはり探偵小説としての興味から来たものである。

芸術として訳するのではない、小説の筋と事実の興味のために訳するといふのも清末翻訳小説の一つの特色であつた。たとへばシェークスピアの戯曲も決して戯曲として訳されたことはない。『瀋外奇譚』といふのを見たことがあるが、これは英国沙士比亞原作と銘打つていても実はラムの沙翁劇梗概の訳であつた。林琴南もやはりこの手で『ジュリアスシーザ』『リチャード二世』『ヘンリイ四世』『ヘンリイ六世』等を訳してゐる。

筋だけ伝えればよいとするから、斬捨御免の意識・節訳・刪訳はめづらしいことでなく、どんな長篇でも薄い一二冊に纏めてしまふ。これは中国には限らぬことで、明治の翻訳界にもいはゆる豪傑訳がなかなか多かつたのである。

もう一つは重訳が非常に多いこと、英・米・仏・独・露・日と各国に互つてゐるやうなものの、その大宗はたゞ英文と日文の二本だけといつてよく、それ以外真の意味の原文について訳したものはほとんど絶無といつても過言ではあるまい。英文から訳したやうに見えて実は原訳は日文であつたり、ま

た林琴南訳の『不如帰』のやうに英文からの重訳であつたりする。しかも重訳者は原訳者の名を出さずに知らぬ顔してゐる場合もあるから信用は出来ない。甚だしきは翻訳または翻案でありながら創作として出されたものも相当にあるらしいから、今後清末翻訳小説の調査が進むにつれてその点が明かにされ、創作の領分が多少縮小されて来るであらうといふことも考へられる。

商品としてでなく、興味のためでなく、純粹に「文学」の移入を目的とした良心的な翻訳は周樹人・周作人兄弟の『域外小説集』より始まる。五四運動以後に於ける外国文学の翻訳もやはり文学を意識してのことである。清末の翻訳界はこれに対して無意識の文学移入であつた。とはいへ、經史子集と『水滸』『紅樓夢』の他に外国にもすぐれたおもしろい小説のあることを知らしめ、国民の文学知識を灌漑して中国文学近代化の素地を作つたことは清末翻訳小説の功績として決して忘れてはならないと思ふ。